

みどり山防災ニュース

発行：三輪緑山自治会自主防災隊編集委員会

三輪緑山3-1-13 ☎044-987-7495



新年のご挨拶

三輪緑山自治会自主防災隊
隊長 渡辺辰美



自治会員の皆さま、明けましておめでとうございます。本年度より自主防災隊の隊長を仰せつかっております渡辺です。

以前より自主防災隊の活動には携わって参りましたが、昨年、一昨年と自治会会長としてさらに自主防災隊のメンバーと深いお付き合いをさせて頂き、改めてその活動の大切さを身をもって痛感いたしました。

特に、会長時代にあらゆる機会を通じて申してきました昔から言われている「向こう三軒両隣り」という言葉は、まさに被災の際に大きなパワーとなるキーワードであるとの感を強くした次第です。

そのような流れもあり、今回この大役を二つ返事で引き受けることとなりました。

毎度言われております**町全体の高齢化**という押し寄せてくる波に対して、被災の際はお互いに助け合う、すなわち**共助**(協助)がなんと言っても一番大切なスタンスであると考えております。助ける側、助けられる側、どちらにとっても、ご近所でお互いに普段から挨拶を交わしていれば心強いものです。

現在毎月実行しております

「じゅんばんまちかど防災訓練」(みどり山ニュースにて案内中)には是非積極的にご参加頂きまして、これが同じ班内の隣人の方々との顔合わせの場になればとも思っております。

三輪緑山では、水害、地すべり、崩落等の災害はまず起きないでしょう。**倒壊、家具による被害と火災**を予防することが、個人、街を救うこととなります。

私は先日、上級救命講習を受講して来ました。**AED、心肺蘇生、人工呼吸**など以前に防災訓練や普通救命講習で実践してきたものも多くありましたが、何より継続的に実地訓練することで失いかけていた自信を大分取り戻す事が出来ました。

歴代の隊長が築き上げてきた**三輪緑山自主防災隊**を、環境変化や増大するリスクに対して新しい手を打ちながら継続活動していく所存ですのでどうぞよろしく願いいたします。



30年以内に約70%の確率で発生すると予測されている「首都直下地震」。緑山の場合は現在震度6弱を想定されておりますが、この地震で倒壊する家屋は、それほど多くないだろうと予測します。しかし家屋の躯体(くたい)に不良が生じた場合など、損傷または損壊程度はあるのかも…と予想します。万一地震が発生した場合、三輪緑山自治会自主防災隊は、震度5強以上の情報をもとに対策本部を自治会館に立ち上げ、本部指揮のもと、住民の安否確認、緊急対応などの行動を開始します。避難・誘導班は2つのグループに分かれ、①一般の避難受付、②避難行動支援がそれぞれ準備態勢を整えます。



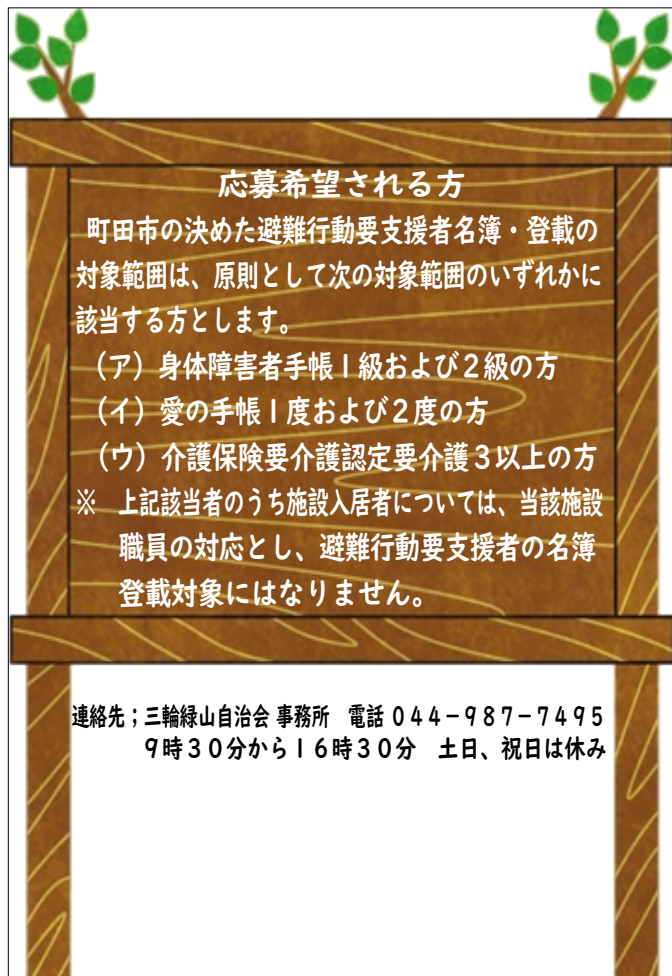
じゅんばん・まちかど防災訓練で 日頃の備えを確認しましょう



①一般避難受付は、避難場所の三輪緑山スポーツ広場に避難受付を開設します。この避難受付では、家屋の損壊が著しく、先々自宅での生活が困難な方を避難施設へ誘導します。避難施設は、三輪小学校になります。三輪の6町会〔上三輪、下三輪、三輪町第一住宅、三輪住宅、三輪緑山山の手坂〕の住民も集中すると予測します。食料、生活備品については短時間で整わない、自治会員でない方の秩序、統率が図れるのか、等々の危惧からこの三輪緑山自治会では、多少の不便を覚悟で自宅での生活を続ける在宅避難を推奨しています。

②避難行動支援は、自治会班長の持ち寄り安否確認プレートの特設から名簿登録された避難行動要支援者を割り出し、避難の必要有無確認、連絡先、搬送、等のお手伝いをします。

避難行動要支援者とは、災害発生時自ら避難することが困難な方であって、その円滑かつ迅速な避難確保をはかるため、特に支援を必要とする方をいいます。この三輪緑山には、約10名の登録された避難行動要支援者がお住まいです。なお、避難行動要支援者の募集は、例年7月頃に自治会回覧でご案内していますが、応募の期限はありません。応募する場合は自治会に「応募したい」旨をお伝えください。応募用紙をご持参いたします。



応募希望される方

町田市の決めた避難行動要支援者名簿・登載の対象範囲は、原則として次の対象範囲のいずれかに該当する方とします。

- (ア) 身体障害者手帳1級および2級の方
- (イ) 愛の手帳1度および2度の方
- (ウ) 介護保険要介護認定要介護3以上の方

※ 上記該当者のうち施設入居者については、当該施設職員の対応とし、避難行動要支援者の名簿登載対象にはなりません。

連絡先；三輪緑山自治会 事務所 電話 044-987-7495
9時30分から16時30分 土日、祝日は休み



方丈記の災害描写から防災を考える

八百年前に鴨長明（かものちょうめい）の著した「ゆく河の流れは絶えずして・・・」の方丈記には、実は災厄が迫真の描写で記されています。このうちの人災を除く四つが自然災害です：①大火、②竜巻、③飢饉、④地震。このシリーズでは、八百年という遥かなる時間を超えて「方丈記」が現代の私たちに語る、「災害に備えよ」との啓示を、肩の力を抜いて、学んでいきましょう！第二回目は、②竜巻です。

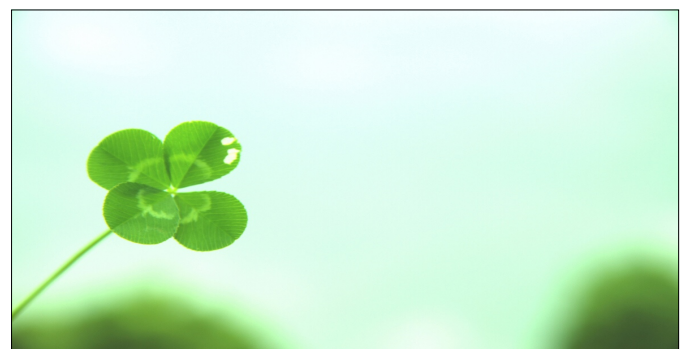
世の変動の兆候となった「辻風」から緑山防災への知恵を読み取ろう

さっそく方丈記に出てくる二番目の災厄「治承の辻風（じしょうのつじかぜ）」の描写を原文と現代語訳で見えながら、今、私たち緑山の住民として何を学ぶことができるか見ていきましょう。

(1)また治承(じしょう)四年卯月(うづき)のころ、中御門(なごみかど)京極(きょうごく)のほどより、大きな辻風(つじかぜ)おろりて、六条(ろくじょう)あたりまで吹ける事侍(はべ)りき。

【訳】(1)大火事があったから三年後の治承四年(西暦1180年)四月のこと、平安京の東北に位置する中御門京極あたりから大きな竜巻が起こって、六条のあたりまで吹いたことがあった。

まず注目したいのは、前回ご紹介した「安元の大火事」(西暦1177年)からまだ三年しか経っていないということです。これは、「災害は忘れる前にもやってくる、つね日頃、防災意識を高く持つこと」と読めるのではないのでしょうか。



(2)三四町を吹きまくる間に、籠(こも)れる家ども、大きなも小さきも、一つとして破れざるはなし。(3)さながら平(ひら)に倒れたるもあり、桁柱(けたはしら)ばかり残れるもあり、門(かど)を吹き放ちて四五町がほかに置き、また垣(かき)を吹きはらひて隣(となり)とひとつになせり。(4)いはむや、家のうちの資材、敷を尽(つく)して空(そら)にあり。(5)檜皮(ひはだ)、葺板(ふきいた)のたぐひ、冬の本の葉の風に乱るるが如し。

【訳】(2)竜巻が三、四百メートルにわたって吹きまくるうちに、その通り道にあった家々は、大きな家も小さな家も、ことごとくこわされてしまった。(3)そのままペしゃんこに倒れた家もあり、屋根や壁板を吹き飛ばされて、桁と柱だけが残った家もあった。ある家の門は四、五百メートルも向こうへ吹き飛ばされたり、垣根が吹き払われて隣の家との境目がなくなってしまったりした家もあった。(4)家屋ですらそんなありさまだから、ましてや家の中にあった家財道具のたぐいは、ことごとく空中に巻き上げられてしまった。(5)屋根の檜皮や葺板などは、まるで冬の枯葉が風に舞い乱れるようだった。

あたかも八百年前の災禍の様子が目に浮かぶようなリアルな記述です。(1)には「辻風」(＝つむじ風)とありましたが、そんなかわいらしいものではありませんね。これまでに見たことも聞いたこともないような大規模の竜巻であることがわかります。

(6)塵(ちり)を煙のごとく吹き立てれば、すべて目も見えず。(7)おびたたしく鳴りとよむほどに、もの言ふ声も聞えず。(8)かの地獄の業の風なりとも、かばかりにこそおぼゆる。(9)家の損亡せるのみにあらず、これを取り繕ふ間に、身をそそなひ、片輪(かたは)づける人、数も知らず。

【訳】(6)風が地面の塵を煙のように吹き立てるので、まったく目をあけていられない。(7)めりめりと大きな音を立てて家が壊れて飛ぶものだから、人の声など聞き取れない。(8)經典にいう地獄の業風(天地一切の物を吹き飛ばす風)でさえ、これほど恐ろしくはあるまいと思われた。(9)被害にあったのは、家屋だけではなかった。壊れた家を修理しようとして怪我をし、不自由な身体になってしまった者も大勢いた。



今も昔も、いったん自然が襲ってくると、為す術無しです。「しまった、あれやっておけばよかった…」が、災害が去った後には数百倍、数万倍の困難な復旧作業となって返ってきます。多くの二次災害も誘発するでしょう。裏を返せば、ここから、日々の備えは大切であるという教訓が読み取れます。

(10)この風、来(ひつじ)の方に移り行きて、多くの人の歎(なげ)きなせり。(11)辻風は常に吹くものなれど、かゝる事やある。ただ事にあらず。(12)さるべきものさとしかなどぞ、疑ひ侍りし。

【訳】(10)竜巻は、さらに南南西の方角、すなわち平安京の中心部に向かって吹き進んでゆき、ここでもたくさんの人々に被害をもたらした。(11)竜巻そのものはよく起こることだし、それほど珍しいものではない。しかし、このたびのような大被害をもたらした竜巻など、私は聞いたこともない。これはただ事ではない。(12)何かとてもよくないことが、近々起こるといふ神仏のお告げではなかろうかと、不安な思いにかられた。

自然は人が想定する規模を越えてきます。台風も、津波も、地震も。長明は、著しく想定を越えた自然の猛威の発生を、とてもよくないことの兆候ととらえています。それはその後、「的中」します。治承の辻風から10年を待たずに、400年にわたる藤原氏を中心とした貴族政治が終わり、平家は滅亡、そして源氏による武家政権(幕府)が開かれるという、大きな変動が起こったのです。これを現在の私たちは、地球規模で気象が変わってきていることの現れ、と読むことでしょう。台風は大型化し、夏に雹(ひょう)が降り、また隣町は晴れなのに我が町は豪雨という超集中ゲリラ豪雷雨は記憶に新しいことと思います。

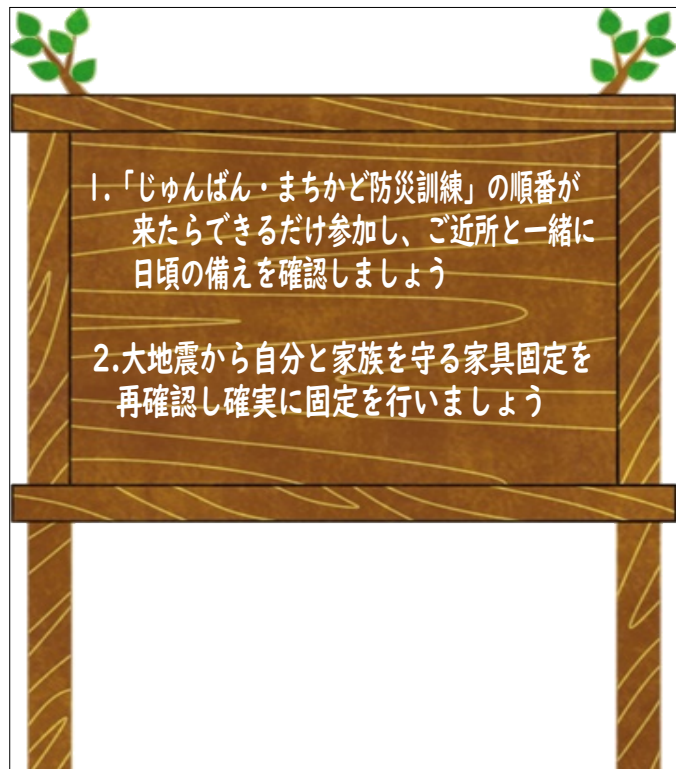
もちろんすべての規模の災害に人は備えることはできません。しかし、「辻風は常に吹くもの」、自然は常に猛威を振るうもの。そもそもよく起きる規模の災害には備えましょう。その備えをもう一歩念入りにしましょう。風災に対しては、風で吹き飛ばされると危険なものが屋根や庭、地域のゴミ置場などないか。それらの構造は劣化していないか。いつもよりも一歩慎重に確認して、整理整頓、そして必要に応じて補強をしましょう。そんなメッセージが聞こえるようです。長明も「冬の本の葉の風に乱るるが如し」と書いていますが、屋根材、壁材、庭材、垣根材、電線など、暴風に舞えばすべてのものが凶器と化し、老若男女の区別なく絨毯爆撃的に襲いかかってきます。たしかに気象の変動は、緑山の住民だけではどうにもなりません。これまでの二桁も三桁も大きな台風が発生し、緑山の街を直撃したら、長明も体感した地獄絵図となるでしょう。しかし、その兆候に耳を傾け、意識を高め、できることをもう一歩広げることができます。

以上は、一防災隊員の、防災に偏った観点からの、あるひとつの読み方に過ぎません。でも、ここまで読んで下さったみなさん(ありがとうございます!), 八百年前の「辻風」の災禍を長明先生の描写越しにリアルに見ましたよね? 空き缶や空き瓶が頭上から襲いかかってきましたよね? その目で、日ごろのちょっとした防災を今一度、もう一歩踏み込んで意識してみてください。



【鯰絵シリーズ】

安政江戸地震（安政2 [1855]年）直後、江戸市中には多くの鯰絵が出回った。



編集後記

世の中デジタル化があらゆる所に浸透してきている。無線の世界もデジタル化が浸透して自治会で防災用に備えている無線機も、アナログ無線機からデジタル無線機への切り替えを検討中。無線をデジタル化すると色々な利点もあるが欠点もある。デジタル無線の一番の欠点は、電波が弱くなると少しづつ聞き取りずらくなるのではなく、いきなりばさっと通話ができなくなってしまう事。事前に予兆が無い事に、人は不安を感じる。その不安感を最小限にとどめるには、訓練が一番効果があるのではないだろうか。防災訓練もそのためにあるのだと思う。